

【論 文】

クリストーフ・オロ・マルチエツロ 『運命について』と
その典拠をめぐる考察

甲斐 教行

ヴェネツィア出身の人文学者クリストーフォロ・マルチェッロ（生年不詳—一五二七年、ローマ没）は、ジュリオ・デ・メディチ枢機卿（一四七八—一五三四年）が一五二三年に教皇クレメンス七世として即位する前から側近として仕え、「ローマ、一五一九年十二月八日」と記載されたラテン語対話篇『運命について』(De fato)（ヴァティカン図書館 Vat. Lat. 5800）を献呈した。側近が当人に捧げたこの対話篇ではジュリオの分身であるユリダスという登場人物が議論の主導的役割を果たしており、ジュリオ本人の思想がある程度反映している可能性が高い。しかしこのラテン語写本にはまだ完全な書き起こしさえ存在せず、本格的な考察がほとんどなされてこなかった^①。そのひとつの要因として、対話篇の内容が煩瑣な哲学的議論であり、論旨の理解が必ずしも容易でないことが挙げられよう。

本稿は、対話篇を直接参照する中で、著者が本文中で依拠した典拠の検討を初めて行い、マルチェッロとその庇護者ジュリオ・デ・メディチ枢機卿の文化的・思想的背景の一端に迫り、その文化的土壌の解明に繋げていきたい。

一 マルチェッロの経歴と本写本執筆の経緯

ヴェネツィア貴族の家系に生まれたクリストーフォロ・マルチェッロの生年ははっきりしないが、早くから聖職者の道を目指したことは、一四九五年以降トレヴィーゾ司教区の聖職志願者としてその名が記録されていることから察せられる。その後パドヴァ大学で学び、一五〇五年に同地の司教座聖堂参事会に参加するとともに、教皇庁最

高書記官に任命されている。ローマでは教皇ユリウス二世に仕えたが、ヴェネツィア共和国とこの教皇との関係は必ずしも良好でなく、その治世中にマルチェッロは早々とジョヴァンニ・デ・メディチ枢機卿（一四七五—一五二一年）に接近している。ジョヴァンニが一五二三年に教皇レオ十世として即位すると、翌年五月二十八日にヴェネツィア共和国領コルフ島（現ギリシャ、ケルキラ島）の大司教に任命された。

マルチェッロはメディチ家との関係から頻繁にフィレンツェに滞在し、特にウルビーノ公ロレンツォ・デ・メディチ（一四九二—一五一九年）の死後、レオ十世の従弟ジュリオ・デ・メディチ枢機卿（一四七八—一五三四年）がこの都の実権を握っていた一五二一年までの間、長期にわたって在任した。その間マルチェッロはおそらくアカデミア・フィオレンティーナと接点をもち、特にマルシリオ・フィチーノの弟子で「アカデミア派のみならず逍遙学派の偉大な哲学者」^③とされたフランチェスコ・カッターニ・ダ・ディアッチェートと深い親交を結んだ。マルチェッロは長年フィレンツェ大学で講義をしていたカッターニをパドヴァ大学に招聘しようと故国ヴェネツィア共和国に働きかけたものの、実現しなかった^④。

マルチェッロが『運命について』に着手したのはおそらく一五一九年夏で、同年秋のローマ帰還時には完成させてジュリオ・デ・メディチ枢機卿に献呈している。パドヴァ学派のアリストテレス研究とフィレンツェの新プラトン主義の融合、キケロの同名著作の影響などが指摘される同書は^⑤、ジュリオの教皇即位を暗示する祝辞を含む献辞のみ、即位後の一五二三年の起草と考えられている^⑥。

その間マルチェッロは、同じくジュリオに献じた「教皇の権威と関連諸事項について、マルティン・ルターの不敬な教義への駁論二卷」(*De auctoritate Summi Pontificis et his quae ad illam pertinent, adversus impia Martini Lutheri dogmata libri duo*) (フィレンツェ、ジュンティ社、一五二二年刊)を刊行した。第一巻で教皇の権威と優位性を擁護し、第二巻でルター派の攻撃対象となった贖宥の有効性を主張している。⁽⁷⁾

ジュリオがクレメンス七世として教皇位に就いた一五二三年、マルチェッロもローマ教皇庁に戻り、翌年にはクレマのサンティ・ジャコモ・エ・フィリッポ聖堂参事会長職を受けた。一五二五年にはヴェネツィア総大司教候補として故国に赴き、選出こそならなかったが、彼の学識と談論を愛したクレメンスは一五二五年に再び彼をローマに呼び戻した。しかし一五二七年のローマ劫掠で、クレメンス自身もサンタンジェロ城籠城からヴィテルボ脱出を強いられたこの未曾有の事態のさなか、捕虜となったマルチェッロは、同年八月にその生涯を閉じることになる。⁽⁸⁾

マルチェッロの対話篇は、ジュリオ・デ・メディチの教皇即位前、ジュリオが四十歳前後の時期に著されており、ジュリオがメディチ家で培ってきた人文主義的教養に対応した内容である。同書の内容を知ることができるのは、ジュリオを取り巻く思想圏の方向性を再確認する契機となるだろう。対話篇が運命をテーマとした背景には、一五一九年春のウルビーノ公ロレンツォの急死によりメディチ家男系嫡子が絶たれ、教皇レオ十世とジュリオ・デ・メディチ枢機卿が直接フィレンツェ政治に介入せざるを得ないという、先の見通しが立たないフィレンツェの政治状況も影響したと思われる。一五一七年春にはレオ十世の暗殺未

遂事件も起こった。⁽⁹⁾ また献呈対象であるジュリオ自身、本写本起草の数年後、一五二二年五月二十二日から八月にかけて共和主義者による暗殺未遂事件に巻き込まれており、本書の論題がいかなる政治的緊張下に起草されたかを窺わせてくれる。

運命をめぐる議論については、古代以来、キケロ『運命について』(四四年)、アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』(一九八年頃)、偽プルタルコス『運命について』(三世紀以後成立)、プロティノス『エネアデス』第三論集第一論文「運命について」(二五三—二六三年の間)、また教父時代にはアウグスティヌス『神の国』第五卷(四二六年以前)、ボエティウス『哲学の慰め』第四—第五卷、(五二四年)といった伝統がある。またルネサンスにおいても、コルツォ・サルターティ『運命と幸運について』(一三九六—九七年)、ピエトロ・ポンポナツィ『運命について』(一五二〇年、出版一五六七年)などが知られているが、本稿ではマルチェッロの対話篇と古代文献との関連に議論を限定する。なお、以下の記述では本対話篇からの引用にあたって写本ページを本文中に明示する。

二 対話篇の概要

さて、対話篇は、運命、幸運、偶然をめぐるものの、四人の哲学者による議論で構成される。短い献辞(II.2r-4r)のち、開始からしばらくの間(II.5r-17r)は、「断固たる運命の擁護者(acerrimus fortunae defensor)」(3v) すなわち偶然論者であるフィロテイクウスと、ストア派の運命決定論者アドラストゥス、そして「他の者たち

より魂と頭脳の火花が秀で、いずれの見解をも否定するものの、彼らの曖昧さを解消したり、妄想を覆すことをあえてしない」(3v)。中間派のヌメニウスの三者で議論を続ける。17vに至ってようやく四人目のユリダス(Lyidas)が登場する。彼の名が作品の献呈対象であるジュリオ枢機卿のラテン名ユリウス(Julius)に由来することは献辞でも触れられている。「私たちの運命についての簡潔な対話篇(中略)を私たちは貴殿の名にちなんでユリダスと名づけます。貴殿の気高さに捧げるため、また万人が、貴殿を尊厳と雄弁と賢慮をもって運命の法則に打ち勝ち超克する者だと知るためです」(3r)。実際、本写本の本文冒頭は、「ユリダス・運命について (VYLIDAS DE FATO)」という言葉で始まっている(5r)。ユリダスはジュリオ枢機卿の分身として、人間の自由意志さえ逃れることができないとする運命決定論を斥け、事象の運行を率いる神の摂理の存在を主張していくことになる。本稿では以下、このユリダスの発言を精査していくことにする。

ユリダスはアドラストゥスに問いかける。「だがどうして君は、不可避の宿命を、過去に生じ、現在生じており、将来生じるであろうすべての事象に課したのか？」(17v)。私たちは人間の行動力、自由な会話が可能ではないのか？悪徳、功績、報酬、法律、教育は虚しいものだろうか？私たちが毎日、眼で見て快楽に誘われながらもその行動を抑制したりする内心の葛藤はなにゆえであろうか？「もし人が宿命に動かされるのなら、どうして正義の道を守る必要があるのだろうか？」(18r)。

ユリダスは、このようにアドラストゥスに反問しつつ、プロティノスの『エネアデス』を議論の土台に据える。『エネアデス』第三論集

第一論文は、人間を運命に従属する存在に貶める恐れのある四つの理論を批判して、知見と徳に従って意志し行動する人間の自由を認めたものである。⁽¹⁾その四つの理論とは、原子を始原とする唯物論的運命論、すべての出来事を世界魂が決定するというストア派的運命論、天(星々)の運行が決定するという占星術的運命論、あらゆる出来事の因果の連鎖を主張するストア派思想である。「実際、学派の中の偉大な人物プロティノスが『エネアデス』第三論集で想起しているあの四つ(の議論)は受け入れられません、まことにこの現象をある人々は原子に、別の人々は天に、別の人々は万象に一樣に浸透する力に、そして最後に大多数の人々が因果の連鎖に帰しているのですから」(19r)。プロティノスがこれらを批判して人間の自由意志を主張するように、ユリダスも最終的には同じ結論に至ることになる。ただしこれら四つの論題そのものはプロティノスに従いつつも、その反駁にあたってはプロティノスの議論をそのまま引き写すのではなく、プラトン、アリストテレス、ケケロから適宜参照しつつ、著者なりの議論を構成している。以下、その内容を検討していく。

三 原子論への反駁

四つの理論のうち、まずデモクリトスやエピクロスが主張した原子論への反駁がなされる(19r-20r)。こゝでユリダスはプラトン『法律』第十巻で挙げられる十種類の運動変化、「プラトンが同書で挙げる全十種類の説明」(19v)に言及する。しかし対話篇の中ではその十種類の運動を具体的に挙げることはなく、議論の前提として言及されるに

留まっている。そこでまずはプラトンの主張を要約しておこう。

プラトンは『法律』第十卷六章（八九三c—八九四d）で十種類の運動変化を挙げる。それは①一つの場所で回転する円運動、②多くの場所を移動する運動、③分解、④合成、⑤増大、⑥減少、⑦消滅、⑧生成、⑨他のものを動かすがそれ自身も他のものにより変化させられる運動、⑩「自分自身をも他のものをも動かし（中略）存在するものすべてを真の意味で変化させ動かすと言われているもの」である。このうち最後の第十番目の動、「自分で自分を動かすことのできる動」こそが、実は第一番目のもの、運動変化の始原であり、それを「魂」の定義であるとする（第七章八九五e—八九六a）。魂こそが万物の始原であり、物体より先に存在する（八九六a—b）。善悪や美醜、正邪などすべての相反することの原因である魂は、動いているものすべてに宿るのだから、天をも統括していることになる（第八章八九六d）。太陽や星々を支配しているのも魂であり、これらの魂は神である、つまり万物は神々に満ちている（第九章八九九b）。神は「わたしたちのすべての行為が魂の働きによるものであって、そしてそのなかには多くの徳も、多くの悪徳もふくまれていること」をよく知っており（第十二章九〇四a）、「わたしたち一人ひとりの意志にその責任があるとされた」。「魂をもつかぎりのものはすべて、自分自身のなかに変化の原因をもっていているのだから、変化するし、そして変化すれば、〔至高の神によってあたえられた〕運命の定めと掟に従って運ばれて行くわけです」（九〇四c）。「ひとはより悪い人間になれば、より悪い魂たちのところへ行くし、より善い人間になれば、より善い魂たちのところへ行く」くことになる（九〇四e）。こうして、神々は存在し、

人間に配慮していることが証明されたと説かれる（九〇五d）。

マルチェッロは対話篇で、以上のプラトンの主張を具体的に紹介しているわけではないが、前述の議論を前提にしていることは確かであろう。かくして、対話篇のユリダスはこう結論づける。「従って、通常デモクリトスに帰される原子も、他の物質も、万物の原因ではないのです。アドラストゥスはこの種の哲学的思考の領域を踏破していません。（中略）（この十個の説明に）全く言及していません。彼自身が才能と学識に優れていることは知っています。しかし運命の必然性を示すなかで、こうした議論へと入り込んでいます。彼は必然性以外にいかなる運命も存在しないと主張しており、少し前に私たちが列挙したあれらの（十個の）説明のどれひとつとして反駁していません」（19v）。このように、『法律』を参照することで、ユリダスは人間の意志が運命を決める論拠としている。

四 ストア派の世界靈魂説への反駁

次にストア派が主張する「浸透力」（世界靈魂）への反駁がなされる（20f-21f）。ここでユリダスは、多種多様な生物や存在を考えると、たった一つの魂がすべてを司ることはありえないと主張する。「世界の一部は天や諸元素のように永遠で、その広大さに従って理解され、それらのいくつかの部分ははかなく、つねに欠乏に左右されていると君は定義できるでしょうに。これらすべての事象が単一の生物の中に発見されることはありません。そのうえ、どのようにしてこの条件さえ許せばどこにでも流布する力が、万象を満たすのでしょうか？（中

略) 実際誰が、獅子が吠え、馬が嘶き、人が笑うとき、世界が吠え、嘶き、笑うのだと主張するほどに、精神に精通しているでしょうか?」(20v-21r)。これに対し、対話相手のヌメニウスは、「たぶんプロティノスはこのようには議論してはいないのではないですか?」と訊ねる。それに対しユリダスは、「全くしていません。ですが実のところ、この者から着想して、諸君と話しながら、彼自身が想起した内容をさらに豊かにしたのです」と返答している(21r)。プロティノスから議論の大枠を採用しながら、自身で議論を發展させたという自覚がここに示されている。さてプロティノスの原文における該当箇所(『エネアデス』第三論集第一論文第四章)を見ると、「仮にもし(中略)世界(全存在)がただ一つのものとして働きかけたり働きを受けたりしているのだとすれば、(中略)すべてのものが原因によって生じるということは真実ではなくて、むしろすべてのものが一つのものであるだろう。したがって、われわれもわれわれでなくなるし、(中略)われわれの考えというものも、実は別の者の思考だということになる。(中略) いやしかし、それぞれの者はやはりそれぞれの者でなければならず、(中略) 各人の(道徳的に)美しい行為と醜い行為は、各人自身から発するのでなければならぬ」と主張されている¹³。論旨の細部は異なるが、たった一つの世界靈魂の存在を否定するという立場はプロティノスを踏まえており、マルチェッロがプロティノスの記述、「われわれの考え」と「別の者の思考」を区別する主張を、他の動物にまで敷衍して展開していることが窺える。

五 占星術への反駁

次に、天体の影響が人間に及ぼす力についての反駁がなされる(21r-24r)。ここでユリダスは直接プロティノスの主張に言及する。「運命が天からこの下界に広まることはありえないとする根拠は多岐にわたりますが、プロティヌスは次のような理由を挙げます。つまり、惑星のしるしをいさきかも示さない多数の事象が私たちの肉体の中に見出されるといふことです」(21r-21v)。プロティノスが該当箇所(『エネアデス』第三論集第一論文第五章十六章)で挙げる論拠には、例えば「生まれの良きについて、(中略)どうしてこの事実が(星々によって)引き起こされたと言えるだろうか。この事実、彼らが予言の拠り所とした星々の位置関係が生じる以前から、両親の身の上すでに存在していたのだから」と、天体の影響と生まれの良きの因果関係を否定する議論が含まれる¹⁴。「それにまた、(人の)容姿が親に似ているという事実が、(人の)美しさも醜さも、星々の運行からではなくて、家系から来ることを告げている」¹⁵。ユリダスはさらに一歩進めて、同じ星の下で生まれる多数の生物の運命の相違を指摘する。「同時期に天の同じ傾向の下で数多くの、むしろあらゆる種類の生物が現れており、それらは運命と天の必然的働きにより同種であるべきところなのに、似ても似つかないのです」(21v)。また著名人の実例をも挙げている。「スティルポーン(前三八〇—前三〇〇年、メガラ派第三代学頭)とソクラテスの慣習についてはとても有名な実例があります。実際、一人(スティルポーン)は、友人たちから(明敏な哲学者とみなされているとはいえ)大酒飲みで女好きと呼ばれながらも、学識によって生来の悪しき性質を支配し、誰も彼を乱暴者とは思わず、誰も彼に情欲のしる

しを認めないほどです。もう一人(ソクラテス)は、人々の人生や才能、慣習を示すのがつねである人相学によれば、首もとにくぼみがないがゆえに、ゾーピュロスによって愚かで魯鈍な人物だと判定されましたが、大いに賢く、最良の振る舞いを身につけていることを示したのです」(21v-22r)。

このソクラテスとゾーピュロスの挿話は、キケロがその『運命について』第五章十節で挙げた実例から引用されている。キケロにおいては、ストア派のクリューシッポス(前二八二—前二〇六年)への反論の中で、風土の性格への影響を認めつつも、個人の個々の行動の自由までは否定できないと論じる文脈で用いられた。ステイルボーンの例では人間の生来の性格が教育によって抑制される点を、ソクラテスの例では人相学的に決定された性格と本人の活動とが不一致である点を指摘して、決定論ではなく人間の自由意志を尊重する議論が展開されている。¹⁷⁾ このキケロの『運命について』への参照は続くストア派駁論の中で特に顕著である。

六 ストア派の因果連鎖論への反駁

続いてユリダスはプロティノスの挙げる四番目の論旨、すなわち因果の連鎖がすべてを決定するというストア派の主張への反駁を開始する(24r-32r)。この部分は議論の核心であり、より多くの紙数が費やされている。

(1) アリストテレスへの言及

ここでユリダスはアリストテレスの『自然学』第二巻、『命題論』、『形而上学』第六巻を、自身の反駁の根拠として名指しする(24v-25r)。しかしこれらの典拠の要約や正確な引用はなく、自身の文脈の中で短く紹介しているに過ぎないので、典拠を直接参照することでユリダスの言わんとすることを推察する必要がある。

ユリダスはまず『自然学』第二巻が「かくもおぞましいこの必然という怪物について特に言及」すると述べ、「結果するところのものは意図や偶然もしくは運命と峻別され遠ざけられるのです。なぜならそこから学問的で正確なものは何一つ出てこないのですから」(24v)と主張する。実際に同書を参照すると、第三章で自然の事象の諸原因について検討が開始され、特に第四章から第五章にかけて、必然と偶運と自己偶発について論じられており、必然以外の偶運の介在が認められている。¹⁸⁾ 第九章においては、必然がある前提条件のもとでのみ成立するという主張が論理的に検討される。例えば「鋸としての働き(効用)をもととならば、それは必然的に鉄製のもの(切るに適した堅さのもの)でなくてはならない。実にこのように、必然的なものは、或る前提条件のもとで(すなわちその目的を条件として)必然的なのであって、無条件にそれ自らで終りなのではない」と述べられている。

次に『命題論』について、ユリダスは「もし生起する万象が必然性によって進行するのであれば、いかなる意図もいかなる選択もいかなる行動や思案の義務も人間には不十分となると主張しています」と述べる(25r)。同書は命題の真偽をめぐる論理学的思索の書であり、その中には、すべての事象の必然的生起を否定する箇所がある。例えば未来の個別的事象に関する命題の真偽を論じた第九章では次のよう

に述べられている。「もし肯定と否定のすべてにおいて（中略）その対立する命題の一方が真で、他方が偽であるのが必然であるとすれば。つまり生じてくるものどものうちには何一つとして偶然によってあるものではなく、むしろすべてのものが存在し、また生成するのは必然によってであるというわけである。従ってこれ、これのことをわれわれがすれば、これ、これのことがあるだろうが、しかしこれ、これのことをしないならば、これ、これのことはあらぬだろうなどと熟慮するにも、苦勞するにも及ばないということになる」²⁰。つまり、絶対的必然性を認めるなら人間の選択の余地は一切なくなってしまう、とこれを否定している。「必然的に存在するのは、あるいは生成するのはすべてのものではなくて、むしろ或るものどもは偶然によってあるものであつて、そして（それについては）肯定、あるいは否定がより一層真であるということはない」と述べられるのである。²¹

ユリダスはまた『形而上学』第六巻でも「同じことがはつきりと明言されている」と述べる(251.)。同巻第三章から引用する。死は必然であるとしても、「病気で死ぬか強制によってかは、まだこれだけでは決定されない。それにはさらに或る特定のことが生じなくてはならない。さてそれゆえに、このことの始まりを求めてたどる過程は或る始まりまではたどりうるが、この始まりより先にはもはや他の始まりは求められない。すると、これが或る特定の偶発的なことの始まりであるに相違なく、これよりほかにはこのことの生じる原因はないであろう」²²。つまり必然ではなく偶然に委ねられる要素を認めている。このような観点から、ユリダスはアリストテレスの主張を必然の絶対性を否定する論拠として挙げたのであろう。

ユリダスは続けて、「少年の良き教育を確立し」「追求すべき美德について戒め」「国家を築くための規則を教え諭し」たプラトンもまた、「必然を（中略）虚妄とみなしています」と述べ、特に『法律』第十巻を挙げる。「そこには魂の判断があり、過ごした人生の功績に見合う報酬が、あるいは過誤に見合う苦悩が、同じ人生そのものの選択が、またその他多くの事象が、御覧のように、運命の必然性を排斥しています」(251.)。前述したように、『法律』第十巻はすでに原子論への反駁においても参照されていた。

(2) ストア派等への言及

これに続いて、ストア派の哲学者たち、「クリューシッポス、ディオドーロス、クレアンテース、カルネアデース、ポセイドーニオス、エピクロス、そしてこの教えの水源から川のように進るその他数多くの者たち」が挙げられる(241-251v)。その中にはディオドーロス（メガラ派）、カルネアデース（新アカデメイア派）、エピクロス（エピクロス派）のように通常ストア派には含まれない思想家も含まれるが、これら七名の全員が、前述したキケロの『運命について』で言及されており、マルチェッロがここでもキケロを参照したことが窺える。

キケロの『運命について』は、エピクロス派の原子論に頼ることなくストア派の運命決定論を批判しようとするものであり、キケロ自身は新アカデメイア派のカルネアデースの見解に沿って、人間の自由意志の存在を擁護しようとしている²³。ただしカルネアデースの反駁それ自体は原文の欠落により必ずしも明瞭には把握できない。

マルチェッロのテキストで、ユリダスはまずメガラ派の哲学者ディ

オドーロス(前三〇〇年頃活動)の見解を取り上げる。キケロは『運命について』第七章十三節²⁴で、「将来起こることはすべて必然的に起こるはずであり、将来起こらないことはすべて起こる可能性がないと主張する」と、ディオドロスの決定論に言及している。ユリダスもまた「過去と未来のすべての事象に必然性を絶対的なものとして課して」とディオドロスの主張を紹介する。「まことに、ディオドロスは未来の事象が必然であると断じていたと思います。その理由は、もし未来の事象が起きないのであれば、その状況の変化がないので、真である陳述が偽に変わりますが、こんなことは不条理であり、人間理性に反するというわけです。まことに、クリュシッポスは未来に関してディオドロスと意見を異にしています」(25r.)。

ユリダスが続けて言及したストア派のクリュシッポス(前二八二—前二〇六年)とディオドロスの論争については、キケロの『運命について』六章一二節—九章十八節で扱われている。²⁵ユリダスはキケロが伝えるクリュシッポスの見解をこう要約する。「実際、未来の全ての事象が必然なのではなく、ただ自然的原因をもつものだけがそのようなのだ、意志に起因するものは必然によって起きるのではないと言っているのです。実のところ、そうしたことが自然的原因から発すると称されるのであり、人間の意志は自然の理に従わないのです」(25v.)。そして新アカデメイア派の創始者カルネアデース(前二一四—前一二九/一二八年)に言及する。「カルネアデースはまことにこの同じ意見に同意しているようですが、動機なしに生じるこれらの事象を、運命の必然性から遠ざけています」(25v-26r.)。

さて、キケロは「我々の自由意志に対する外的な、そして先行する

原因というものは存在しない」というカルネアデースの見解を(十一章二三節)²⁶、「実際に起こる事柄はすべて運命によって起こる」とは限らない、という結論になる」(十四章三一節)と総括している。キケロによれば、クリュシッポスは運命決定論と自由意志論との両立を図ろうとしたものの、そこに無理が生じ、それに対しカルネアデースが反論を加えたことになっているが、本文の欠落のためカルネアデースの論駁については知ることができない。²⁷それに対し、マルチュエロのテクストにおけるユリダスは、クリュシッポスとカルネアデースの双方を人間の自由意志の擁護者と認めている。「カルネアデースとクリュシッポスは(中略)両者とも運命から意志や人間の命令の下にあるものどもを遠ざけているように見えます。ただし彼らは、それらばかりか、自力ではなく自然の根本的法則によって生じるものどもも(そうであると)認めています。(中略)しかし彼らは疑いなく最大の誤謬に陥っています、なぜなら、あのようなすべての生じうる事象は、もしそれらを、あたかも一人の神がそれらを与えたかのよう、個別に取り上げるのであれば、容易には生じないような、自然の事象のそのような配置に由来するのです。そのことは後々もつとわかりやすく詳細に説明されるでしょう」(26r.)。

ここでユリダスは、ゼノンの弟子でストア派の第二代学頭であったクレアンテース(前三三一—前二二二年)に言及する。「クリュシッポスの師匠でクレアンテースとかいう人物も彼らに近いのです。彼は過去の出来事にも必然性に関してある種の区別があると主張しています。実際、すべての事象が必然なのではなく、ただ自然を導きかつ支えとして進行するものだけがそうだと主張しています」(26r.)。しか

しケケロは、七章十四節で、これら師弟の見解の相違点を指摘している。⁽²⁸⁾マルチェッロはケケロと異なりこの師弟の相違には触れず、近似的性を強調する。「その根拠は次の文章です。『ヌマンティアはスキピオにより攻略された』。さらに(スキピオ自身が主張しました)、この町が攻略されたのは必然ではない、なぜならこのことは人間の力によって成し遂げられたのだから、と」(26v.)。ヌマンティアはヒスパニア内陸のケルティベリア人の拠点都市で、ローマに敵対していたが、一三三年にスキピオ・アエミリアヌス(小スキピオ)により占領された。この小スキピオの命題は、ケケロにおいては直接クレアンテースと関連のない文脈で用いられていた。⁽²⁹⁾マルチェッロはストア派であるにも関わらず「過去に関する真なることはすべて必然である」⁽³⁰⁾という命題を否定するクレアンテースの主張を紹介する中で、ケケロの素材を原著そのままの文脈から取り出し、自由に組み合わせながら、自分なりの議論を展開しているように見える(26v.)。

(3) エピクロスとデモクリトスへの言及

続いてユリダスはエピクロス(前三四二／三四一―前二七一／二七〇年)の論に言及する。「まことに、エピクロスの見解は、すべての事象が運命(fatum)に支配されているのではないものの、私たちがふだん運命とも呼んでいる偶然(casus)と幸運(fortuna)は、すべての事象に優先する、というものです。(中略)この学派の人々は、どの文章も真であるとか偽であるとか主張しない、未来の時制を示すすべての文章は真実か誤謬かの兆しを帯びない類いのものだ、という見解に至りました」(27r.)。

エピクロスについてもケケロの言及がある(九章一八―一九節、十章二―二三節)⁽³¹⁾。ストア派とカルネアデースが「あらゆる事象には原因がある」と考えるのに対し、エピクロスは「原因なしに起こる事象が存在する」と考える。エピクロスが自由意志を擁護するために導入したのが「原子の逸れ」という考え方であるが、それだと人間の自由意志も「原子の逸れ」によって説明がつかない。⁽³²⁾

マルチェッロの対話篇で、ユリダスはピロクテースの命題に言及する。ピロクテースはトロイア戦争におけるギリシャ軍の弓の名手で、毒蛇に咬まれた傷が悪臭を放ったためトロイア行きの船から降ろされレムノス島に置き去りにされたが、十年後に彼の弓がトロイア陥落に必須との神託が下り、オデュッセウスによりトロイアに連れてこられることになった。ソポクレスの悲劇の題材ともなったピロクテースの命題について、ユリダスの発言を引用する。

「もしあることがまだ、やがて起きるであろう事象になっていないなら、そのことについての未来時制の動詞による陳述は、真でも偽でもありえないのです。またもし『ピロクテースが傷を負うことにより』が(起こりうるとおりに)絶対的なものとして設定され、実際その通りになるとしても、確固たる決定された真実ではありません、負傷前には負傷しない可能性もあるのです。そこから引き出されることは、(望むと望まざるに関わらず)ピロクテースが傷を受けるといふいかなる必然性も存在しないことです。しかしこのことが起こり、起こった通りにしかならないときには、そのときそれは確実で決定した真実の陳述なのです」(27v.)。

『ピロクテエースが傷を負った後』にはこの人物が傷を負ったことは実際に決定されているが、傷を負う前には、傷を負う可能性はあるものの、それは決定した真実ではありません』(27r-27v)。

キケロはこの命題を、『運命について』十六章三六一三七で、永遠の因果を認めるストア派への反駁として用いた。エピクロスはこの命題を真でも偽でもないものと主張しているが、キケロによれば『ピロクテエースは傷を負うであろう』ということは太古の昔から真であり、『傷を負わないであろう』ということは偽であった』(一十六章三七節)³³。その一方で、ピロクテエースが蛇に咬まれる前には彼がレムノス島に取り残される原因は自然界に存在していなかった。従って、『太古の昔から真であるとともに、なおかつ永遠の因果の連鎖に縛られておらず、また運命の必然から解放されているような事柄も存在する』という結論に至る、とキケロは主張するのである(一十六章三八節)³⁴。

この後、議論は「運命というより幸運の擁護者 (fortunaepotius qui fati defensorem)」(28r)とユリダスが述べるデモクリトス(前四六〇頃—前三七〇頃)に移る。キケロはデモクリトスを、『運命について』十章二三節では「原子論の創始者」として、十七章三九節では運命決定論者の一人としてその名を挙げるが、詳述はしていない。マルチェッロの対話篇におけるユリダスは、以下のように要約する。「万象の原因であり、それらの性質の必然性に従って万象がそれに動かされるのだと彼が提起するあれらの虫のように小さな粒子、そのす

べてが運命のために存在していることを彼は示唆しているように見えます。だがまた彼は、同じものどもが、そうした最終的な意図なしに数多く寄せ集まり、幸運と偶然の手が原子の逸れに道を開くのだとも主張しました」(28r)。

最後に中期ストア派の哲学者ポセイドーニオス(前一三五—前五一〇年)が検討される。「ポセイドーニオスは、私たちが知っているように、極めて多くの事象が運命に従属し、自然との接触により生じるとしていますが、私たちの自由意志の下に置かれる他の事象をどのように扱うのか私は知りません」(28r)。³⁵キケロはポセイドーニオスが挙げる運命の予言的中の事例を、偶然によるもので無意味、と論じている。例えば、馬から落ちて死ぬと預言されたダピタースが「馬」という名の岩から突き落とされて死んだ、とポセイドーニオスが挙げる事例を、キケロ(三章二節)は偶然の産物と否定するのである。ポセイドーニオスに関してマルチェッロはキケロの論旨を全く取り上げていない。

こうした議論を検討したのち、ユリダスは、「哲学者たちの見解を調査し議論するというこうした関心は私たちの義務です。真実が、それはもはや暴かれたのですが、無傷のままであることで十分です」と述べ、古代の哲学者たちの議論を打ち切る。プロティノスが挙げた四つの要素に対する反駁はここで終わる。

七 逍遙学派とアカデメイア派

ヌメニウスは、ユリダスがこれまで多くの哲学者について優美に

語ってきた、と述べ、「君には偉大な天与の資質と希有な優美さが至高の神から与えられており、それによって君は才能、学識、雄弁の点ですべての人間に勝っています。また心の資質においてもそれに劣らず、それゆえ君は威厳と命令の能力においてすべての人間に勝るよう見えます」(28r.)とユリダスを讃える。多くの才が君一人に宿っている、「もし君の雄弁がこれらのことに決着をつけてくれるなら、私たちは全員君にお願いし、残りの事について君が説明し語り続けるよういざなうのです」(28v.)と、他の疑問にも答えるよう促す。

ヌメニウスはまず、世界を統べる運命が存在しないとしても、自然の導きや、人間の意志によらずに偶然に起きる事象についてはどうなのか、と問いかける(29r.)。ユリダスは、「逍遙学派的に語るならば」(29r.)と断って、しばしば生起するもの、絶えず永続的に生起するもの、一時的に生起するものを挙げ、自然に導かれるもの、人間の意志によって進行するものを区別する。以下、意志、偶然、必然の区別、自然との関係について説明を続ける(29r.-30r.)。

ヌメニウスは、自然や天の運行における必然性の支配についてなおも懸念し、さらなる説明を請う。ユリダスはヌメニウスに、アドラストウスの議論を要約するよう求める(30r.-30v.)。以後、ヌメニウスを相手にその議論の解決を試みていく。

ここでユリダスは、逍遙学派とアカデミア派が議論の導き手であると改めて述べ(「もうあなたは確信できるでしょう、私はこの海を私の二人の艦長(逍遙学派とアカデミア派)とともに航海し、人が容易に(水を)汲み出すことができる真理の港へと至ることを決心した、と」)(30v.)、アリストテレスの思想を説明し始める。

アリストテレスによれば、神はたとえすべてを明晰に認識しているにせよ、人間や現世にかかわる事象には関知しない。神の意志によつてすべての事象が産み出されるのであり、必然性によるのではない(31r.)。未来のすべての事象は必然ではなく、神の認識の想定下にあるにすぎない(31v.)。ただ、万象を知ろしめす神の性質は必然だが、神が認識している他の滅び行く事象は必然ではない。従ってアドラストウスの決定論は反駁された、と述べる。アドラストウスは、自分の議論のうちのひとつを解決したに過ぎない、と言う。こうして、その他の議論についても検討することになる(32r.)。

八 その他の議論

以後、ヌメニウスが、アドラストウスによる種々の問題提起について解決を求め、ユリダスがそれらの疑問に答えていく。これらの議論の主旨は必ずしも明瞭ではなく、ユリダスの返答が十分な解決となっているかについても判断しかねるが、ひとまず筆者に可能な範囲で議論の内容を要約する。

まず最初に、過去の事象が必然性をもって生起したのなら、未来の事象もまた必然性を有するのではないか、という疑問が呈される。これに対しユリダスは、未来の事象は必然性によっては捉えられず、生起しない可能性もある、と返答する(32v.)。

次に、すべての事象の必然的原因である太陽が、日の出と日没など必然の法則に従って運行している、という主張が検討される。これに対しユリダスは、太陽がすべての事象の原因といっても、必然性によ

らずに生起する、原因を欠いた事象も存在する、と返答する (33r.)。

次に、退廃の原因なしに起こると考えられているが、そもそも生成こそが退廃の原因なのだ、という主張が検討される。これに対しユリダスは、退廃は数多くの原因によってもたらされるもので、ひとつの決定的な原因によるものではない、と返答する (33r.)。

次に、ある任意のものが他のものから起こることは真実とは言えないが、特定のものから特定のものが生じるのは必然ではないか、という主張が検討される。これに対しユリダスは、その必然性は絶対的ではない、なぜなら最初のものも存在させている状態 (装置) もその本性から必然的に形成されているのではないからだと答える (33r.-33v.)。

次に、誕生すべきものは必然性によって絶対的に誕生するのではないか、という主張が取り上げられる。これに対しユリダスは、生殖を決定付けるものにはこれを妨げる無数の要因があり、必然性によっては進行しない、と説く (33v.)。

次に、諸原因には自然が制定する秩序が存在し、先行する上位の原因がつねに後続する結果を生み、それが原因となって必然的に下位の原因をもたらし、このようにすべての事象が必然的に生じる、という主張が検討される (34r.)。これに対しユリダスは、天の運行には変化や偶発性 (たまたま半月になる、というような) が介入するため、天の個人々人への影響には偶然が介在し、必然性によっては生じない、と説く (34r.-34v.)。

次に、「もしある石が下降するなら必然的に、運動の終着点まで到達する」ことになるが、それはわれわれの感覚に反する、というパラ

ドックスが検討される。つまり手にした石を下に運ぶ際に、石はある位置まで妨げられることなく下降し、同様に第三、第四、第五の、そして最終的な位置にまで妨げられることなく下降する、という理屈が挙げられる (34v.-35r.)。これに対しユリダスは、途中のある空間、すなわち「中間点もしくは中間点を過ぎた最初の地点にあるとき」、運動は妨げられ得る、と主張する (35r.)。

最後に、生成はしたけれども、生成しないこともありえたものが存在するならば、一度も質量の中に生成されなかったものも生成され得ることになり、活動として実現しないある種の力というものが存在する、という主張が検討される。これに対しユリダスは、質量の中に存在する力に、産出されるものの近くにあるものと遠くにあるものが二重になっているのであって、例えば秋にはすでに質量の中に春の形相が準備されている。従って活動に至らない力が存在するのは決して矛盾ではない、と説く (35r.-35v.)。

ここに至って、対話相手のヌメニウスは「もはや宿命に関する諸問題について議論は尽くされました」と述べ、最後にアドラストゥスの見解を問う (35v.)。アドラストゥスは、ユリダスの見解に決して異を唱えない、自分は石やダイヤモンドで出来ているのではない、そこまで強情ではないし、「理屈の通ったことには、反対意見の存在を許さない真実には、譲る」のだと返答する (36r.)。

九 プロティノスの信条告白

ここでユリダスが議論を締めくくる。以下、その言葉を訳出する。

「かくして、最善最大の神のおかげで、私は諸君が私と同様に不死であることを思い出させるのです。実際、この他ならぬ神からあらゆる善き事象が由来するのであり、その光によって世界のあまたの装飾と、私たちと神々の精神の輝きと、天の運行と、諸元素の秩序と、地上の出来事と、万象の管理が保たれるのです。神ご自身が唯一にして善であり（実際他の呼び方をしては非礼です）、万物を司り、万物に恩恵を施し、随所に彼の善を行き渡らせます。最善にして、至高にして、万物の上に形成された一者は、真に理解されたり、それ相応の尊厳を備えた名で呼ばれることは決してありません。それは神と呼ばれますが、神というより精神と言えるでしょう。しかもそれは精神の上に存在し、というよりむしろ存在しないまま、精神に導かれ観察されるのです。神は善良であり、すべての私たちの知性の霧と現世の汚辱から分離して、万象を包含し、自身の法則と権威に従って法と自然とを配分します。儀式や莫大な奉納物によってではなく、厳格な手法による神聖な犠牲、清らかな誓願によってであれば、折れて心を動かされるでしょう。求める者にとっては精神の中に火のように煌めき、私たちの魂はその輝きから汲み上げずにはおきません」(36v.)。

こうした主張にはプロティノスの影響が色濃く認められる。

実際、「最善にして、至高にして、万物の上に形成された一者」、「唯一にして善」なる神から「あらゆる善き事象が由来する」、と述べるユリダスの認識は、例えば以下のような『エネアデス』の一節と比較

しうる。「善者の本性は単純で、したがってまた第一位であり（中略）、われわれが『一者』と言うばあいも、『善者』と言うばあいも、同一の本性が意味されているのだと理解されなければならない」（『エネアデス』第二論集第九論文第一章⁽³⁶⁾）。「その一なるものは、万物を生むことの可能な力として存するのである」（第五論集第一論文第七章⁽³⁷⁾）。「万物がかのものから出て来ることになるのは、かのものが絶対単純な一者であって、かのものは、どんな形容によっても、占有されてはいなかったという事情に基づくからである」（第五論集第一論文第七章⁽³⁸⁾）。

また神の地上界への広がりや光に喩え、「その光によって世界のあまたの装飾と、私たちと神々の精神の輝きと、天の運行と、諸元素の秩序と、地上の出来事と、万象の管理が保たれる」と述べた一節は、『エネアデス』の「たとえば、自己自身の内にどどまっているある一つの明るい光源から発した光が広範に拡散したばあいに、拡散したものは模造品で、光源が実物である。とはいうものの拡散した模造品、つまりヌースも、（一者と）別物ではなく、その各部分が条理であり原因である。そしてかのもの（一者）は、原因の原因である」（第六論集第八論文第十八章⁽³⁹⁾）といった箇所を想起させる。

さらに神が「厳格な手法による神聖な犠牲、清らかな誓願によってであれば、折れて心を動かされる」といった、人間の側からの祈りに言い及んだ箇所は、神への祈りの効能について触れた『エネアデス』のいくつかの章句により鼓舞されたことだろう。「そして君が今表象している球（直知界）を制作した神（ヌース）に呼びかけて、来て下さいと祈りたまえ。その神が、彼の世界をひっさげ、その世界の内のすべての神々を引き連れて、来たり給わんことを」（第五論集第八論

文第九章⁴⁰)。「かくてわれわれは、直接神の助けを呼んで——といっても、声高なことを用いるのではなく、魂の上で自分自身を引っ張り上げて、神への祈りに導くのであって、われわれはこのような仕方によって、他のものを交えず、神と自分だけになって、直接神に祈ることができるのである(中略)」(第五論集第一論文第六章⁴¹)といった教えに通じていくものであろう。

マルチェッロの対話篇全体がプラトン、アリストテレス、キケロの主張を折衷しながら自己流の議論を展開していることはたしかであるが、議論の土台にプロティノス『エネアデス』が核となっていたこと、プロティノスの世界観が議論を総括していることを鑑みると、ユリダス・ジュリオ・デ・メディチ枢機卿にとりどのような思想文化圏が前提とされていたかの一端が推測されよう。

対話篇の末尾で、ヌメニウスはユリダスのもとを辞去するに際して、「なぜあなたは常にもまして背中を曲げているように見えるのですか?」と問いかける。ユリダスは返答する。「私は苦しいのです」。ヌメニウス「つまりだれしも現世では幸福でいられないというわけですね」。ユリダス「お疑いですか? だれしもがそうなのです。ですからこうしている今も、私はプロティノスばりに (plurimi more)、肉体に内在していることに恥じるのです」(36v-37r)。なぜなら、『エネアデス』が説くように、「魂の肉体に内在する部分は、すべて眠っているのである。それで、魂のほんとうの目覚めとはほんとうに肉体から出て起き上がることであり、(中略)ほんとうに起き上がることは、肉体から完全に離れて起き上がることであり、肉体は魂とは反対の種

族に属するものであるから、そのあり方(本質)において魂とは相反するものを持っているのである」(第三論集第六論文第六章⁴²)。

以下、「ローマ、一五一九年二月八日」の記載をもって対話篇は終わる。このように、ユリダス・ジュリオは本書の最後に直接プロティノスの名を挙げ、現世の憂愁に言及しているのである。対話篇の序盤の、ユリダス登場に先立つ場面で、ヌメニウスはすでに本論題に関わった著者の一人として、「学問の流派における、私たちのプロティノス (Plotinus noster in achademica familia)」(Sr.) とこの哲学者の名を挙げている。フィレンツェではマルシリオ・フィチーノが一四八四年に『エネアデス』のラテン語訳に着手し、一四九二年に印刷本を出版するなど、プロティノス研究が盛んに行われた。フィチーノの弟子フランチェスコ・カッターニ・ダ・ディアツェートとマルチェッロが深い親交を結んでいたことは前述した。本対話篇が献呈されたジュリオ・デ・メディチ枢機卿は、叔父ロレンツォ・イル・マニーフニコの息子に当たる二人の従兄弟、ジョヴァンニ・デ・メディチ(のちのレオ十世)及びジュリアーノ・デ・メディチ(一四七九—一五一六年、ヌムール公)とともに、一四八九年から九一年にかけてピサ大学で学ぶとともに、ジョヴァンニの家庭教師を務めたフィチーノ、アンジェロ・ポリツィアーノらの指導を仰ぐ機会があった。「私たちのプロティノス」はジュリオとマルチェッロに共通する文化的基盤であったのである。

ジュリオ・デ・メディチ・クレメンス七世の庇護下にあったマルチェッロがジュリオの分身ユリダスに帰した思想に迫ることは、この教皇が後援した多くの美術家——ミケランジェロ、ベンヴェヌート・

チェッリーニ、バッチョ・バンディネッリ——の研究に寄与する点が多いと信じて⁽⁴³⁾、小論を結びたい。

註

- (1) 本写本の先行研究としては I. Polverini Fosi, *Il ms. Vaticano latino 5800: un'opera inedita di Cristoforo Marcelli, in Le chiavi della memoria. Miscellanea in occasione del I Centenario della Scuola Vaticana di Paleografia, Diplomatica e Archivistica*, a cura della Associazione degli ex-allievi, Città del Vaticano 1984, pp.441-460 だけが存在し、序文 (2r-4r.) のみ書き起し⁽⁴⁴⁾ された (pp.459-460)。本写本とシユリオ・チ・メディチ枢機卿の関連については S.E. Reiss, *Cardinal Giulio de' Medici as a Patron of Art, 1513-1523*, diss. Ph.D., Princeton University, Ann Arbor 1992, p.190 にも指摘がある。
- (2) マルチェッロの経歴については Polverini Fosi, *op. cit.*, p.442 ss. を参照。
- (3) B. Varchi, *Vita di m. Francesco Cattani da Diacceto, filosofo et gentil'uomo fiorentino etc.*, in F. Cattani, *I tre libri dell'amore etc.*, Vinegia 1561, p.187; Polverini Fosi, *op. cit.*, p.447.
- (4) Polverini Fosi, *op. cit.*, p.448.
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*
- (7) *Ibid.*, p.449.
- (8) *Ibid.*, pp.450-452.
- (9) Reiss, *op. cit.*, p.168.

(10) A. Zandonati, *La congiura contro il cardinale Giulio de' Medici*, Rovereto 1891, p.23.

(11) 水地宗明、プロテティノス『エネアデス』第三卷第一論文「解説」『プロテティノス全集』、田中美知太郎監訳、中央公論社、一九八六——一九八八年、二巻、田之頭安彦訳、一五四頁。

(12) プラトン『法律』(下)、森進一ほか訳、岩波文庫、二六八——二七二頁。十種類の運動変化の分類は、同書二七一頁三行目の註に従った。

(13) プロテティノス、前掲書、一六四——一六五頁。

(14) プロテティノス、前掲書、一六七頁。

(15) プロテティノス、前掲書、一六八頁。

(16) キケロ『運命について』、五之治昌比呂訳、『キケロー選集』十一、岩波書店、二〇〇〇年、二八六——二八七頁。この箇所がキケロ『運命について』からの借用であることは、Veronica Vestri 氏から教示を受けた。Ringrazio vivamente Veronica Vestri, che mi ha gentilmente informato della derivazione ciceroniana in questo passo.

(17) キケロ、前掲書、二八四——二八六頁。

(18) 「われわれは、このような物事(すなわち、ごくまれに生起し存在する物事)が偶運によってであり、また逆に偶運によってである物事がこのような(ごくまれに生起する)物事だということを知っているからである」。アリストテレス『自然学』第二卷第五章一九六b、出隆訳(『アリストテレス全集』第三卷、岩波書店、一九六八年、六二——六三頁)。

(19) アリストテレス『自然学』第二卷第九章二〇〇a、七九頁。

- (20) アリストテレス『命題論』第九章十八b、山本光雄訳(『アリストテレス全集』第一巻、岩波書店、一九七一年、九八頁)。
- (21) アリストテレス『命題論』第九章十九a(前掲書、九九頁)。
- (22) アリストテレス『形而上学』第六卷第三章一〇二七b、出隆訳(『アリストテレス全集』第十二巻、岩波書店、一九六八年、二〇一頁)。
- (23) エピクロスはあらゆる事象に原因があるという考え方を否定し、「原子の逸れ」という概念を導入するが、キケロはこれを荒唐無稽なものとして一蹴する。ストア派とカルネアデースはあらゆる事象に原因があることを認めるが、ストア派がその原因を「外的で先行する」因果の連鎖と考えるのに対し、カルネアデースは人間の自由意志を認め、原因をまさに自由意志の本性そのもの、いわば内在的な原因とみなすことによって自由意志を擁護している。これがまさにキケロの立場である。キケロはクリュシッポスの論に最も多くの紙数を費やしているように見受けられる。五之治昌比呂「運命について」解説(前掲『キケロー選集』十一、三四二—三四三頁)。
- (24) キケロ、前掲書、二八九—二九〇頁。
- (25) キケロ、前掲書、二八九—二九四頁。五之治、前掲書、二八九頁、註(1)、二九二頁、註(1)〜(2)も参照。
- (26) キケロ、前掲書、二九九—三〇〇、三〇五—三〇七頁。
- (27) 「クリュシッポスは、あたかも立派な調停者のように、中道を行こうとしたように思える。だが、実際には、『精神の運動は必然に縛られていない』と考えたい人々の方に傾いているのである。しかしながら、彼は自分独自の言葉を使って論じているうちに、しづしづ運命の必然を認めねばならないような困難に滑り落ちてしまったのである」(キケロ、十七章三九)。五之治、前掲書、三四六—三四七頁も参照。
- (28) キケロ、前掲書、二九〇頁。五之治、前掲書、二九二頁、註(7)も参照。
- (29) キケロ、十二章二七節、前掲訳、三〇一頁以下。
- (30) キケロ、七章十四節、前掲訳、二九〇頁。
- (31) キケロ、前掲書、二九五—二九八頁。
- (32) キケロ、前掲書、五之治、三四三—三四四頁。
- (33) キケロ、前掲書、三一—一頁。
- (34) キケロ、前掲書、三二—二頁。
- (35) キケロ、前掲書、二九八頁。
- (36) プロティノス、前掲書、二卷、一〇—二頁。
- (37) プロティノス、前掲書、三卷、三七—八頁。
- (38) プロティノス、前掲書、三卷、三八—〇頁。
- (39) プロティノス、前掲書、四卷、五五—一頁。
- (40) プロティノス、前掲書、三卷、五四—四頁。
- (41) プロティノス、前掲書、三卷、三七—四頁。
- (42) プロティノス、前掲書、二卷、三三—〇頁。
- (43) ミケランジェロに《最後の審判》を最初に依頼したのはクレメンス七世であった。ベンヴェヌスト・チェッリーニには大外衣のボタンと金杯(いずれも現存せず)、教皇を表したメダルや貨幣を制作させている。また枢機卿時代を含め、バッチョ・バンディネッリの前半生の主要作品の依頼に関わった。

後記

筆者は十六世紀フィレンツェの彫刻家バッチョ・バンディネッリの研究にあたって、この芸術家の前半生における最大のパトロンであったジュリオ・デ・メディチ・クレメンス七世の思想圏を検討する必要に迫られた。そうした中で、本稿のテーマは避けて通ることのできない課題であった。思想史を専門としない筆者にとり、マルチェッロの写本の解読は悪戦苦闘の連続であり、ラテン語の難解な文章をイタリア語訳して頂いた文献学者ヴェロニカ・ヴェストリ氏のご協力がなければ到底なしえない作業であった。氏のご尽力に深く感謝する。ただし本稿の内容についてはすべて筆者に責任がある。思わぬ誤解や不十分な理解がみられるかもしれないが、マルチェッロの写本が未刊行でほとんど研究の対象となつてこなかったことを鑑み、敢えて公刊に踏み切つたことをご寛恕頂きたい。

Ringrazio vivamente Veronica Vestri per avermi molto generosamente tradotto il difficile testo del *De Fato*.

本研究は、平成三十一—令和三年度文部科学省科学研究費助成（基盤研究（C））の成果の一部である。

（二〇二一年三月三十一日受理）

〔かい のりゆき／副所長・本学教育学部教授〕